

# 令和4年度 鹿屋中央高等学校入学試験問題

## 国語

### 注意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて八ページです。これとは別に解答用紙が一枚あります。
- 3 受験番号は、解答用紙及び問題用紙の決められた欄に記入しなさい。
- 4 答えは、問題の指示に従って、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 5 監督者の「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

受験番号	
------	--

次の1・2の問いに答えなさい。

1 次の――線部のカタカナは漢字に直し、漢字は仮名に直して書け。

(1) 道路をカクフクする。 (2) 野菜を細かくキザむ。

(3) 代金をフタンする。 (4) 意見に相違がある。

(5) 考え方が偏る。

(6) けがで棄権する。

ア 稚 イ 掘 ウ 遵 エ 統

2 次の行書で書かれた漢字をそれぞれ楷書で書いた場合、総画数が「郵」と同じになるものはどれか。次から選び、記号で答えよ。

論文を構成するためによく使われる論法が比較対照です。比較とは、何が同じで、何が違うか、どちらがいいか、などを考える方法です。「共通点」と「相違点」などという言葉を使って議論を展開することも一つの方法です。観点ごとに整理して違いを分析したり、その優劣などの判断をつけていくことができます。

比較対照の観点による述べ方としては、「～という観点から比べてみると、Aは……、一方、Bは……」のような書き方があります。「一方で」「反面」「その点、Bは……」のような表現を使うことができますが、おもしろいことに、「面」という方向や「点」などといつたいわば空間や図形を利用して、比較という考察を「イメージ化」していることに気づきます。考えをまとめていく場合にも、一度図に書いてみて、どういう関係なのかを整理しておくといいでしよう。

仮説と検証による論の構成もあります。仮にこうだと考えてみる。それで正しいかどうかを考える、という方法です。仮説とはまだ証明されていない考え方です。「～ではないだろうか」のような形で提出され、それについて本当かどうかを検証していきます。「この場合はどうか」「もしこうなればどうか」など様々な場合をシミュレーションすることで議論を深めていくことができます。

仮説を設定すること自体が議論となることもあります。「こんなことがある、あんなことがある」というように、関連する事実を重ねていって、「一般に～である」のような一般性を持つた議論を仮説として設定します。そして、一つ一つの例を具体的に見ていく、「だから、まとめるところと言えるのではないか」というように一般化していきます。これは帰納法<sup>①きのうほう</sup>と呼ばれる考え方です。ただし、この方法での証明には難しさもあります。例えば、

1、2、4、8、16……

というように、数字が続いている場合があつたとしましよう。これを見ると、前の数の二倍の数が次にくるのではないかという仮説が成立しそうに思います。その点で、次に32が来ると予想するかもしれません。**a** 次に、「1」が来れば、それだけでその仮説は成立しないことになります。「1、2、4、8、16、1、2、4、8、16……」といった繰り返しであつたとすると、こんどは別の仮説を考えないといけないのです。

例えば自分の周囲で早起きをしている人が風邪を引かないということを觀察したとしても、早起きは風邪を防止する、という議論には結びつきません。このように、ある範囲で示唆されることがあつたとしても、それが全体として成立するかどうかは、確定的ではないのです。量的な証明や理由や背景の説明などがあれば、その議論は説得的になります。

□ b、仮説の否定は簡単です。一つでも反例が見つかると、その仮説は成立しない、あるいは例外を含む仮説となってしまうからです。

何かを分類するという思考も大切です。今まで違いがわからなかつたけれども実はこんなに違うのだ、といったことを発見できるような新しい分類ができれば、そこには新たな見方が提示されることになります。

分類というとなんだか難しそうですが、身近なことです。よく言われることですが、たいていのものは三つに分類できます。例えば、「歌が好きかどうか」という分類では、「歌が好きな人」「歌が好きではない人」「どちらともわからない人」です。このような当たり前の分類で論が深まるわけではありませんが、分類によって、それぞれの特徴はどうか、などと考えると自分なりの議論の整理ができ、それをもとにした解釈を展開することができます。

当然のことですが、分類すること自体が目的なのではなく、分類によつてどのような対応関係が説明できるのか、いかに整理できるのか、が重要です。分類によつてこれまで区別できていなかつた違いが明らかになり、より深い正確な見方ができる、といったことが重要です。逆に、これまで違つとされていたものが実は同じことだつた、というように整理し直せることもあります。

例えは、咳せきをしている病気があつたとして、インフルエンザか、風邪か、ぜんそくか、という病気としての分類ができることで、診断が成立し、その治療ができるわけです。分類は分析でもあります。

さらに、自分なりに分類を考える場合、定義や基準を考えることになります。例えは、「野球が好きな人」といつても、いろいろな場合があることに気づきます。どういうところが好きか、とか、自分がするスポーツなのか、見るものとしてのスポーツなのか、など、いろいろな観点があるので。どのような観点からどのように分類できるかを考える

ことで、「秩序立つた見方」ができるようになります。

分類ではその基準が重要です。しげつけい、つまり自分勝手な、その場限りの分類にならないか、に注意が必要です。先に「歌が好きな人」という分類ができると言いましたが、どのような基準で「歌が好きな人」と認定するのかは、実は難しい問題なのです。歌うのが好きなのか、聞くのが好きなのか、年間いくらくらいお金を使つているのか、コンサートなどに行く頻度はどうか、など、いろいろな観点からの基準が考えられます。どういう議論にしていくかによつて、意味のある分類基準は何かということは変わつてきます。

(森山卓郎『日本語の〈書き〉方』による)

1 本文中の＝線部①とは、どのような方法であると筆者は説明しているか。六十五字以内で書け。

2 －線部①とは、どのような方法であると筆者は説明しているか。六十五字以内で書け。

3 本文中の □ a □ · □ b □ にあてはまる語の組み合わせとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- |           |         |
|-----------|---------|
| ア (a ところで | b そこで)  |
| イ (a つまり  | b ところで) |
| ウ (a ただし  | b 例えば)  |
| エ (a しかし  | b もつとも) |

4 次の文は、――線部②に関する筆者の考え方を説明したものである。

〔I〕には二十字以内の言葉を考えて書き、〔II〕には文章中から最も適当な四字の言葉を抜き出して書け。

基準にはいろいろな観点があり、〔I〕は変わるということを頭に置き、〔II〕分類にならないよう留意すべきである。

5 次のア～エは、この文章の内容について四人の中学生が考えたものである。筆者の考えに最も近いものを選び、記号で答えよ。

ア 比較という考察を、空間や図形を利用していわば「イメージ化」する述べ方がありますが、これは、自分の考え方を図に書いて整理してまとめていくとします。

イ 仮説はまだ証明されていない考え方ですが、仮説によつて様々な場合をシミュレーションすることで議論を深めていくことができます。比較対照の方法に比べてより確かな証明ができます。

ウ 早起きの人が風邪を引かないなど、自分の周囲で観察したことについて、量的な証明や理由や背景の説明などがない限り、それが全体として成立するかどうかは、確定的ではありません。

エ 分類により、これまで違つとされていたものが実は同じだったことがわかる例として、インフルエンザ、風邪、ぜんそくがどれも咳をする病気であるということが挙げられています。

### 3

次の文章を読んで、あとの1～4の問いに答えなさい。

おなじ心ならん人としめやかに物語して、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなく言ひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらんと向ひゐたらんは、ひとりある心地やせん。

（たがひに言はんほどの事をば、「げに」と聞くかひあるものから、いささか違ふ所もあらん人こそ、「我はさやは思ふ」など争ひ憎み、「それだから、さぞ」ともうち語らはば、つれづれ慰まめと思へど、げには、少しがこつかとも、我と等しからざらん人は、大方のよしなしげ」と言はん（不満を言う点でも）ほかこつかとも、我と等しからざらん人は、大方のよしなしげ」と言はん（言つていいほどこそあらめ、まめやかの心の友には、はるかに隔たる所のありぬべきぞ、わびしきや。

（兼好法師『徒然草』による）

1――線部①「をかしき」を現代仮名遣いに直して書け。

2――線部②のようになるのは、どのようなときか。最も適当なもの

を次から選び、記号で答えよ。

ア 自分と気心が同じようだと思つていた相手が、実はそうではなかつたことがわかつて向かい合つているとき。

イ 自分と気心が合うわけではない人が帰つてしまつて、一人残されたあとで自分自身の心に向き合つているとき。

ウ 自分と気心が同じような人に對して、その人にそむくことがないようにして、向かい合つて話をしているとき。

エ 自分と氣心が同じような人に對して、その人にそむくことがない

3 線部③の意味として、最も適当なものを次から選び、記号で答

えよ。

- ア 聞くことはあるものの イ 聞くかいはないから  
ウ 聞くつもりはないが エ 聞くかいはあるけれども

4 次は、本文について話し合っている先生と生徒の会話である。

〔I〕 〔III〕に適當な言葉を補つて会話を完成させよ。ただし、  
〔I〕には本文中から最も適當な一字の言葉を抜き出して書き、  
〔II〕・〔III〕にはそれぞれ十字以内でふさわしい内容を考えて現  
代語で答えること。

先生 この文章で兼好法師は、自分の考える〔I〕とはどのようなものであるかを語っていきますね。

生徒A 自分と意見が違うような人は、「〔II〕」などと言い争つて憎んだり、「それだから、そうなのだ」と話し合うならば、所在なさも慰められるだろうと言っています。

生徒B でも、自分と等しくないような人は結局、眞実の心の〔I〕と〔III〕存在であると考え、そこに寂しさを感じています。

〔えー、問題は、『0以上10000以下の中の整数の中で、10進法で表記したときに1が現れないようなものすべての平均を求めよ』、というものですね〕

何それ？

朝先生が読んだ問題に、とわは、軽く引いた。朝先生の音読は日本語として伝わってはきたし、わからない単語はない。にもかかわらず、問われていることがわからない。従つて、何をどうしたらいいか、最初の手立てからしてわからない。

「この問題をみんなはどう解こうとしたんだっけ？」

「1が現れる数の和を全体の和から引いて平均を出しました」「各位ごとに平均を取つて考えました。王道だけこれがいちばん速くて美しい」

「自分はとにかく1が現れない数を本気で足して平均を出しました。3

439個。辛抱我慢の足し算つす」

〔なんですか？〕

思わず声が出てしまう。

「どうしたの？ とわさん」

「い、いえ。同じ問題を解いてるのにやり方が違うのはどうしてかなつてこれまで自分が教わってきた算数や数学は、解き方が決まっていた。

单元ごとに計算の仕方や公式を覚え、その決まりに当てはめて解を導き

4 次の文章を読んで、あととの1～5の問い合わせに答えなさい。

高校二年生の野崎とわは、新聞部の助つ人として数学研究部の取材を頼まれた。数学研究部には男子部員三人と女性の志村朝先生がいる。先生による問題の解説に、とわも付き合うことにしてた。

出していた。だから問題を読んだらまづどの公式を使うかを思い出し、ミスをしないように計算を重ねる。計算には決まり事が多い。四則計算は掛け算と割り算が先、かつこの中の計算が先。イコールを隔てるとプラスマイナスが逆になることもあるなど。それらを途中でちょっとでも間違うと、不正解が出る。

決められた道筋を経ても間違うのに、三人のやり方が初めから違うことが不思議だった。

すると朝先生は「ふふ」と笑った。  
〔それは数学が自由な学問だからよ〕

〔自由?〕

聞き間違いをしたかと思った。数学ほど不自由な教科はない、と。・・・は常々思っている。数学には、「遊び」や「大目に見る」という許容範囲が一切ない。ほんのささいな間違いも断じて許してはくれない、情け容赦のない教科だ。プラスマイナスが違うだけ、小数点がひとつずれているだけで不正解になる。

なのに朝先生は、きつぱりと繰りかえした。

「そう。数学は素晴らしい自由な学問よ。正解に辿りつくルートはたくさんあって、どの道を選んでも、そこでどんなアプローチをしてもいい。・・・の。絶対的に正しいものの前では、安心して自由でいられるのよ」「……絶対的に正しいものの前では、自由でいられる」

初めて出合った概念に、視界がすっと広がった気がした。気持ちのよい風さえ感じる。

とはいえた決して実感は伴わない。自分の感覚として理解はできない。

数学の授業中、とわはいつも、窮屈で硬い箱に閉じ込められているような気がしている。手足も出ないし息も苦しい。そのうえ、指名されて答えを求められるかもしれないという恐怖もある。

算数のころから取り残されぎみだつたとわが、完全に振り切られてし

まつたのは、中学校で関数が登場してからだ。一次はまだしも二次関数になると式を作るのも難しくなった。高校二年生になった今年の教科書には、三角関数なる単元もあって、関数はいつたいどこまでバリエーションを広げれば気が済むのかと思う。

数学を思うだけでも胸苦しいとわだが、かまうことなく朝先生は解説を始めた。赤い唇から発せられる言葉は「ペラペラペラ」としか聞こえず、黒板の数字や記号は、しゃれたパン屋の紙袋の、ロゴかなんかにしか見えない。

一応ほかの問題にも目を落としてみる。問題は全部で十二問。計算問題はなく、すべて文章と図形の問題だ。どれかひとつでもわかりそうなものはないかと、読み進めてみるがそれさえ難儀した。記号や数字が差しはさまれているせいか、読書のように、物語のほうから迎えに来てくれるのだ。

・・・わは、やっぱり諦めてスマホを取り出した。  
せめて任務を遂行しなくては。

数研部員の三人は新たな問題を囲んで一か所に集まり、相談を始めていた。

シャツジャー音を何度も響かせたが、三人が顔をあげるようなことはなかつた。

〔○※の定理を……〕

〔□◆定理……〕

〔P A • P B = ……〕

もれ聞こえてくる会話からは、問題の輪郭さえ見えない。

話しあいながら数学の世界を旅するごとき二人は、眺めているだけでぼうつと視界がかすむようだつた。

(まはら三桃『無限の中心』による。問題作成のため、本文の一部を改めた。)

1 — 線部①とあるが、とわのこのときの気持ちを、とわのこれまでの考え方にもふれて、六十字以内で書け。

2 — 線部②の言葉を聞いたとわの気持ちとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 数学ほど不自由な教科はない、ふだんから思っているため、先生の発言は先生の思い違いであつてほしいと願つている。

イ 数学はゆとりのないもので、小さな間違いも許さない不自由な教科だと思っているので、先生の発言に疑問をもつていてる。

ウ 数学は不自由な教科だと感じるので、先生の発言を間違いだと考えたが、実は自分が間違っていたのだと思っている。

エ 数学が自由な学問であるはずはないが、先生の発言は誇張した表現であるから、大目に見て受け入れようと思っている。

3 次の文は、——線部③の言葉を聞いたとわについて説明したものである。□ I には——線部③よりあとの本文中から最も適当な四字の言葉を抜き出して書き、□ II には十五字以内の言葉を、「意味」という言葉を使って書け。

視界が広がったような気がしたものの、とわは数学に対して□ I 思いを抱いているため実感がわかつず、続けて説明する先生の言葉や板書を、□ II と感じた。

4 — 線部④を、とわはどのようなものだと考えているか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 言葉に記号や数字が差しはされていない、易しい内容のもの。

イ 理解しやすい言葉により、明るい気分をもたらしてくれるもの。

ウ 読むと物語の世界におのづと自分が引き込まれてゆくもの。

エ 自分の想像を膨らませることで、物語の深い感動を得られるもの。

5 — 線部⑤とあるが、このときのとわの気持ちとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 数学のことが理解できず、新聞部としての取材を諦める気持ち。

イ 難しい数学から離れて、気晴らしで時間をつぶしたい気持ち。

ウ 数学の問題はひとまずおき、新聞部の仕事を進めたいたい気持ち。

エ 数学研究部の活動について、新聞部に連絡をとりたい気持ち。

太郎さんは、市の図書館をよく利用しているが、図書館に対してもいろいろな意見をもっている。下の会話は、その意見の一つについての、太郎さんと母親との会話である。これを読んで、～線部X・Yのどちらか一つを選択し、次の(1)～(5)の条件に従つて、あなたの考えを書きなさい。

### 条 件

(1) 二段落で構成すること。

(2) 第一段落には選択した意見の良いと思われる点を書くこと。

(3) 第二段落には、選択した意見の特徴によつて生じる問題点を書くこと。

(4) 六行以上八行以下で書くこと。

(5) 原稿用紙の正しい使い方に従つて、文字、仮名遣いも正確に書くこと。

太郎 「市の図書館に、普通の本以外に、漫画の本も置いてくれればいいと思うんだ。」

母親 「普通は図書館に漫画は置いてないわね。置くのはどんな漫画がいいの？」

太郎 「源氏物語」「三国志」のような古典文学をもとにした漫画や、実際の歴史を扱った漫画は、図書館に置いていいと思うんだ。」

母親 「なるほどね。それもいいけど、漫画は日本を代表する文化の一つと言えて、海外でも高く評価されているのよ。手塚治虫の作品など、名作と言われている漫画は図書館に置いていいかもしれないわね。」